【 8 】

氏名	魏　鈾　原
授与した学位	博　士
専攻分野の名称	学　術
学位授与番号	博甲第１８７３号
学位授与の日付	平成１１年　３月２５日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則第４条第１項該当)
学位論文題目	安岡章太郎の文学と思想
論文審査委員	教授　岩間　一雄　　教授　工藤　進思郎 教授　下河部　行輝　　教授　谷　聖美

学位論文内容の要旨

本論文は、安岡章太郎の作品『悪い仲間』から『僕の昭和史』に至る各時期の主要作品を取り上げ、安岡の文学と思想を、全６章にわたって考察したものである。既発表論文２編に新たに書き起こした章を加えて全体を統一したもの。Ａ４版ワープロ打ちで１２９ページ、４００字詰め原稿用紙約３８０枚である。

その主題は、安岡文学について、これまで「政治的関心の欠如」が指摘されたが、その文学活動や社会的諸活動についてみると単純に「政治的関心の欠如」とは断定しきれないこと、安岡には安岡なりの政治的な関心があることを明らかにし、さらに安岡文学の独特の政治的関心のあり方、政治的スタンスを解明すること、にある。

第１章　『「郷士」の視点』―『流離譚』の世界

『流離譚』は、幕末から明治にかけての安岡家の人々の生涯を丹念に掘り起こした、一つの土佐藩史、一つの維新史である。そこには、支配層最底辺者への同情と支配層上層に対する批判という作者の視点が強く刻印されている。そうした眼差し一つとっても安岡について政治的関心の欠如を語ることは不適当であることが分かる。『流離譚』は一族に伝わる日記や文書を用いた「私」史であり、それは、「自分史」としての『僕の昭和史』にも直接繋がって行く。また、それまでに創作されたフィクションや評論を貫く安岡の視点、いわば下積みの者への同情的な視点が、一族の歴史を綴るこの作品の中で、あらためて確認されるのである。それは安岡文学の序論であり、総括である。安岡研究の第１章にこの作品が置かれる所以である。

第２章　弱者の文学―初期作品を中心に

安岡の初期作品群の中では、最底辺層、下積みのもの、弱者への眼差しが、様々な文学的形象において描き出されている。例えば、『遁走』という作品の中で、安岡は普通の真正面からの戦争批判ではなく、主人公の「胃袋や腸」などの反逆を通して、軍隊から戦争遂行能力を奪うという仕方で、戦争に対する異議申し立てを行う。マイナス部分を拡大強調することで、強大な帝国軍隊を無力化させてしまう逆説的な強者を描出するのである。ただし、この逆説的強者は、自ら戦争を乗り越える展望をもち得ない点で、ついに弱者たるに留まるのであるが。

第３章　普遍的テーマへの萌芽—『海辺の光景』を中心に

『海辺の光景』は、敗戦を間に挟んだ二つの時代の犠牲になった家庭を描く。家庭という社会の最小単位における夫婦愛・生と死などを描くことによって、世の中の現実を強烈に見せつける。作者がここで語ろうとしているのは、人間関係の崩壊した戦後社会そのものである。ここでは従来のシュルレアリスム的な手法が影を潜めレアリスム的な手法が正面に出ている。それと同時に問題への迫り方がよりシリアスになっている。ここでの最終的なテーマは、弱者と強者という相対的な世界でなく、生と死との極限的状況の中で、対立と差別を乗り越える愛と和解という普遍的なテーマである。

第４章　選別システムと落第者—『私説聊斎志異』を中心に

一生科挙に落第し続けた蒲松齢の『聊斎志異』を手掛かりに、安岡は、時代を越え、地域を越えて人間を支配する選別システムを剔り出す。戦前と戦後の巨大な激変にもかかわらず、選別システムそのものは、世界を支配する「大きな力」である。日本の戦前戦後はもとより、悠久な中国の歴史をも一貫して支配するのは、巨大な選別システムであると、安岡はいう。この選別システムは、少数の勝利者を生み、勝利者の権力と支配との源泉となる。反面、そこには厖大な落第者が生み落とされる。その落第者の恨みつらみの憂鬱こそ、安岡の理解した『聊斎志異』である。こうした選別システム批判に、安岡の社会に対する姿勢を見ることが出来るだろう。

第５章　もう一つの和解—『アメリカ感情旅行』『志賀直哉私論』を中心に

その後のアメリカ留学が、安岡の視点をさらに深化させる。アメリカの北部と南部との対立を、利益社会と共同社会との対立として体感したとき、安岡は志賀直哉の父への対立感、自分の父への対立感を、歴史的に読み解き、和解に至る方法を知ったといえる。安岡は、志賀と祖父を共同社会、志賀の父親を利益社会と考え、それを手がかりに、志賀と父との対立を読み解く。そして、その同一のアイディアによって、安岡は、父と母との対立、父と自分との対立を読み解く。

明治以降西洋近代の利益社会のシステムが日本に伝わる。資本主義が導入され、米経済が貨幣経済に変わる。社会全般は貨幣によって規制され、共同社会にあったある種の「救い」が消え、貨幣という無情のものにコントロールされ、被支配者は悲惨な状況に追い込まれる。しかも、共同社会にあった非合理はそのまま存続した。安岡は、日本の近代社会を、「西洋からきた先進国的な階級差別と、日本在来のもの」との「相乗」だと捉える。利益社会における情け容赦ない競争と従来の共同社会に由来する差別とが結合することで、かつての差別状況がより一層深刻となっている、とする。

そして、安岡によれば、こうした社会の中に生きる人間は、利益社会の新しい論理と共同社会の旧い論理とに引き裂かれ、互いに争いあうのであるが、人間が自らの依拠している論理の意味を対象化することによって、自らの限界を知り、愛と和解の道を選ぶことが出来る。一つが感覚的な形で描かれた『暗夜行路』の場合であり、今一つが以上の論理の対象化を通して、自己の限界を批判して父の理解に至った安岡の場合である。

第６章　安岡文学とその政治的スタンス—『僕の昭和史』を中心に

『僕の昭和史』は、安岡の少年時代からの自分史であり、それは自ずから昭和という時代を語ることになる。彼は、軍医（獣医）少将の子供として、父の転勤にともなって転校を重ねる成績の奮わない落第生の視点から、１５年戦争の時代を描き出す。それは自ずから、時代への批判的姿勢を結果するけれども、その批判はまた、下積みのものからする屈折した批判たらざるを得ないだろう。安岡には軍国主義に対する「嫌悪」があるが、それは明確な「反戦意識」にまで高まることはなかった。

戦後の安岡の政治的姿勢は、左右の政治的立場に距離を置く点では、「非政治的」であり、その点第三の新人に数えられる遠藤周作、吉行淳之介と共通であるが、安岡には、遠藤のような左翼への嫌悪感は薄く、下積みのものへの同情心と右翼への強い嫌悪感をもつ点で、吉行ときわめて近い。そこに安岡の独特の政治的スタンスがある。

結論

以上のような考察の後に本論文の引き出す結論は、１、安岡には日本近代社会における二重の差別を「改め」るために、民主主義を発展させ、議会政治を健全させることであるとする指摘のあること、ただし、２、安岡は、政治がすべての問題を解決できる訳ではなく、政治と文学は車の両輪ごとく共同して差別と闘うべきものだと考えているということ、そして、３、最終的には、差別と対立を乗り越えた愛と和解の世界への希求こそが安岡文学の核心であるということ、以上３点である。

論文審査結果の要旨

学位審査会は、１９９９年２月３日開催され、学内審査委員４名によって学位審査が行われた。審査の結果は以下の通りである。

１　本論文は、安岡章太郎を文学と思想という観点から、総合的に研究したものである。いうまでもなく安岡は、現存作家であり、その研究は、先駆的な服部達の評論や、個々の作品解説的なものを別とすれば、なお未開拓な分野である。そうした分野に対する初の本格的な研究であり、その所説はおおむね妥当である。

２　本論文は、安岡文学を貫く視点として、下積みのものへの同情と支配層に対する批判を検出し、それが初期の作品から後期の作品までほぼ一貫して見出される点を指摘する。一族の歴史である『流離譚』や私史である『僕の昭和史』には、とくにそうした視点が強く現れており、安岡文学の特質とその思想的意味を解明する上で、この指摘は有益である。

３　本論文は、安岡の日本社会理解を、３つの観点から明らかにしている。選別システム、共同社会、利益社会の３である。共同社会、利益社会はそれぞれの仕方で選別システムであり、日本社会とは選別システムとしての共同社会の差別と利益社会の差別との「相乗」である。本論文は、安岡の日本社会理解がそのようなものであったことを解明する。

こうした安岡の日本理解の解明は、安岡の評論（『アメリカ感情旅行』『ソビエト感情旅行』『志賀直哉私論』『差別　その根源を問う』など）や、いくつかの文学作品を理解する上で、有益である。

４　本論文は、安岡文学の今一つの重要なテーマとして、愛と和解というテーマがあることを指摘する。それはとくに『海辺の光景』において認められるところであるが、生と死という大きな自然の摂理を前にするとき、人間は相対的な対立を乗り越え、愛と和解に至るとするのが、安岡文学の重要なテーマであるとする。

この指摘は、安岡文学の二大テーマの一つを明確にするものであり、とくに、最近の安岡の文学活動（『死との対面』『我等なぜキリスト教徒となりし乎』）の意味を見通す上でも、重要な指摘である。

以上の積極的評価と並んで、次のような問題点が指摘された。

１　差別への闘いと愛と和解という二つのテーマ相互の関連のより精密な究明の必要。

２　文学作品としての評価、たとえば、『海辺の光景』の時系列の錯綜した回想描写の意味、父と子との対立の、志賀の場合と安岡の場合とのより精密な描き分け、評論の間に挿入される俳句の意味への留意など、さらにきめ細かい分析評価の必要。

3　安岡の指摘自身に対する、著者による意味づけ、たとえば、三島に対する安岡の評価が引用されるが、その引用に対する著者による意味づけの必要。

4　キーワードである「政治」「政治的関心」等についてより精密な限定付けの必要。

以上の諸点全体を総合検討した結果、問題点として指摘された点は、本論文が、今後さらなる発展を遂げる上での期待といった趣旨のものであり、本論文が、自立した研究者の出発を告げるものであることを否定するものでないことが確認された。

審査委員会は、以上により、本論文を学位論文として認定するにつき、全員一致で合意した。